

2021年5月16日復活節第7主日（昇天後主日）説教

司祭バルナバ菅原裕治

出エジプト記 28章 1節-5節、9節-10節、29節-30節

使徒言行録 1章 15節-26節

ヨハネによる福音書第 17章 11節 C~19節

本日は、復活節第7主日です。復活節は今週で終わります。来週は聖霊降臨日・ペンテコステです。先週の5月13日（木）が昇天日でしたので、本日は、昇天後主日でもあります。先週の昇天日から、東京教区でも『Thy Kingdom come（み国が来ますように）』というタイトルの祈りのキャンペーンがはじまりました。今年は藤田充聖職候補生、笹森田鶴司祭、スティーブン・クロフツ司祭が、それぞれ「朝の黙想」、「昼の祈り」、「夜の黙想」を担当され、動画配信とリモートでの祈りをを行います。すでにご覧になった方、参加された方もおられると思います。また今年は管区事務所が小冊子「11日間の祈りのしおり（昇天日～聖霊降臨日）」を作成し各教会へ送付しています。わたしたちの教会でも、総務の方々が不足分を印刷して皆様のところに発送してくださいました。今年はことに、コロナ禍によって物理的な交わりが絶たれてしまう状況にあります。教会であるからこそ、祈りによるつながりがより深めたいと思います。

この11日間に関係することですが、復活されたイエス様は、そのあとどこにいかれたのか。この問いに対して、わたしたちは「天に昇られた」と理解しています。それは、「使徒信経」に「**天に昇られました。そして全能の父である神の右に座しておられます**」、「ニケヤ信経」に「**天に昇り、父の右に座しておられます**」とある通り、基本的な信仰告白にかかわる事柄です。また、昇天日の特禱に、「**全能の神よ、わたしたちは独りのみ子イエス・キリストが天に昇られたことを信じます**」とありました通り、祈りつつ信じるべき対象でもあります。

ただし、イエス様が天に昇られたという記述は、初代教会にとって最初期の文書になるパウロ書簡には、イエス様が天におられることを前提としている、あるいは暗示させる箇所はありますが（フィリピ3:20、テサロニケー4:16）、昇った否かは明記していません。また、最初に書かれたと思われる「マルコによる福音書」は、そもそも復活の姿を描写していません。「マルコによる福音書」には、「結びの1」があり、「**主イエスは、弟子たちに話した後、天に上げられ、神の右の座に着かれた**」（マルコ16:19）となっていますが、これは後代の加筆であると考えるのが定説です。『新約聖書』の冒頭に位置している「マタイによる福音書」にも記述はありません。

イエス様が復活後に天に昇られたという伝承が、いつごろからあったかは不明ですが、文書としては、「ルカによる福音書」と「使徒言行録」から始まりました。それらを具体的に見ますと、「ルカによる福音書」の24章50節と51節では「**イ**

イエスは、そこから彼らをベタニアの辺りまで連れて行き、手を上げて祝福された。そして、祝福しながら彼らを離れ、天に上げられた」とあります。「使徒言行録」の1章3節には、「イエスは苦難を受けた後、御自分が生きていることを、数多くの証拠をもって使徒たちに示し、四十日にわたって彼らに現れ、神の国について話された」とあり、その後、10節と11節で、「イエスが離れ去って行かれるとき、彼らは天を見つめていた。すると、白い服を着た二人の人がそばに立って、言った。『ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる』」と続いています。

イエス様は、復活されたあと、40日間地上に滞在され、その後天に昇られた。そして、そのさらに10日後、つまり50（ペンテコステ）日後に聖霊が下るといふ時間設定、つまり昇天日から聖霊降臨日という教会歴の基となった時間設定は、これら「ルカによる福音書」と「使徒言行録」の記述から作成されたのです。これらの内容について、イエス様の復活の出来事と同じように、歴史的事実であるか否かを確認することは、あまり重要ではありません。聖書がそのように記した意味を理解し、信じるのが大切です。

ただし、このように明確に時間的な整理がなされたがゆえに、一つの疑問がわきます。復活されたイエス様が天に昇られ、聖霊が降る前の10日間は、地上にはイエス様もおられない、聖霊もまだ下っていない、つまり神的存在が手薄な空白期間ではないかということです。この10日間を、主なる神様が地上を直接支配している期間ととらえるべきか、地上が人間だけで神的存在が空白で、サタンが好き勝手できる期間ととらえるべきか迷います。しかし、教会の歴史の中で、そのようなことが問題になったことはなかったようですから、大丈夫なのでしょう。ただし、少し想像力を豊かにすると、その期間、弟子たちはイエスが天の昇られた後、かなり不安であったのだらうと思われまふ。イエス様が残して下さった言葉を信じるしかなく、使徒言行録の描写によれば、それゆえに、彼らは「心を合わせて熱心に祈っていた」（使徒1:14）のでした。

さて、本日の使徒言行録は、それらのお話の続きです。イエス様が昇天された後、弟子たちがこれからのことを協議しているところです。「そのころ、ペトロは兄弟たちの中に立って言った。百二十人ほどの人々が一つになっていた」とあります。その記述からわかることは、弟子たちの中心はペトロであり、弟子たちは再び集まって、120人にもなっていたということです。彼らが最初に行ったことは、イスカリオテのユダの最後についての確認でした。

このイスカリオテのユダは、一般的に裏切り者の代名詞となっています。しかし、その最後について、福音書の記述はそれぞれ異なっています。「マルコによる福音書」は、何も記していません。本日の「ヨハネによる福音書」は、「わたしが保護したので、滅びの子のほかは、だれも滅びませんでした。聖書が実現するためです」

(ヨハネ 17:12) と記しており、イスカリオテのユダが滅びたことを暗示すると同時に、それが聖書に基づいた事柄であるとしています。また、最後の晩餐の場面の記述で、「ユダがパン切れを受け取ると、サタンが彼の中に入った」(ヨハネ 13:27) と記しており、イエス様を敵対者に引き渡す行為が、サタンによるものであることを記しています。それらから考えますと、ユダの行ったことは、主体的な行為であったかどうか不明、とも受けとれます。「マタイによる福音書」は、イスカリオテのユダの最後について、『わたしは罪のない人の血を売り渡し、罪を犯しました』と言った。しかし彼らは、『我々の知ったことではない。お前の問題だ』と言った。そこで、ユダは銀貨を神殿に投げ込んで立ち去り、首をつって死んだ」(マタイ 27:4) と明記しています。「ルカによる福音書」自体は、その最後について何も記していません。しかし、「ヨハネによる福音書」と同じように、「しかし、十二人の中の一人で、イスカリオテと呼ばれるユダの中に、サタンが入った」(ルカ 22:3) と、イスカリオテのユダの行為が、サタンによるものであることを明記しています。また続編といえる「使徒言行録」の本日の個所で、「マタイによる福音書」の記述とは異なりますが、その最後が明記されています。そして、その冒頭には、「兄弟たち、イエスを捕らえた者たちの手引きをしたあのユダについては、聖霊がダビデの口を通して預言しています。この聖書の言葉は、実現しなければならなかったのです」と説明されており、イスカリオテのユダの行為は、聖書の記述に基づく事柄であると説明されています。

イスカリオテのユダは、教会の歴史において、裏切り者と理解され、その理解は今も継承されています。しかし、これらの聖書の記述は、ユダをそのように理解することを目的として記述されているとは思えません。ユダの出来事が、『聖書』に基づく(預言された)行為であったと位置付けていると思います。すなわち、神の意志に基づく出来事であったと記していると思います。もちろん、サタンが入ったからと言っても、ユダには自分の判断があり、目的があって、イエス様を引き渡したことは否定できません。そして、その判断や行いが、肯定されるわけではありません。しかし、『聖書』は、ユダに見られるような、人間の考えや判断による、何かを目的とした行為が、愚かな結果をもたらす危険性を指摘すると同時に、それらを用いても救いの道を開く、主なる神様のみ心を示していると思います。

そうはいつても、イスカリオテのユダが欠如することによって、12人という象徴的な数である使徒に欠員が生じました。それは大きな不安的材料です。それゆえ、「使徒言行録」だけは、一二使徒の補充を記述します。補充にあたって候補となる条件は、「主イエスがわたしたちと共に生活されていた間、つまり、ヨハネの洗礼のときから始まって、わたしたちを離れて天に上げられた日まで、いつも一緒にいた者の中からだれか一人」というものです。これはイエス様の一年間という活動期間に一緒におり、イエス様の逮捕の前後にいったん裏切って逃げたとしても、ほかの弟子たちと一緒に戻ってきて、いまここにいる人ということです。この条件で使徒を選ぶとなると、極めて人数が限られます。さて、そこで、「ユストともいうヨセフと、マティア」の二人が候補となり、祈った後、くじ引きで、マティアに決ま

ったのでした。

選択方法はくじ引きです。これは聖書的な選び方といえます。わたしたちは、誰かを選ぶ時、多数決という方法に慣れています。しかし、多数決は、人間の思いの集大成にほかなりません。くじ引きは、人間の思いを排除した方法です。いずれにしても、こうして、使徒を補充して準備を整えるが、弟子たちの新しい歩みが始まりであった、と「使徒言行録」は記しています。そしてそこに聖霊が下り、教会の歩みが始まったのです。

この使徒言行録の個所と、本日の旧約聖書との関連は何でしょうか。それは、「主なる神様のために何かを備える」ということにあるかと思えます。本日の出エジプト記は、幕屋の建設に関する記述の一部です。幕屋とは、機能的には神殿と同じと考えてよいのですが、神様が臨在する場所であり、言い換えると、主なる神様の「栄光」が現れる場所です。「栄光」が現れるために、どのような道具、洋服、それらの飾りなどの備えをするか、それが記述されています。「使徒言行録」も、「主の栄光」を示す教会が始まるために、使徒一人を補いその備え、準備をしたと記しているのです。

福音書との関係はなんでしょうか。それは、新しい歩みのために準備をする人々のために、イエス様が祈ってくださるということです。本日の箇所は、最後の晩餐の後、これから体を通してイエス様に会うことができない弟子たちに対して、イエス様が祈ってくださっている場面です。それは、「ヨハネによる福音書」を読んでいる人にとっては、今、自分たちは、身体的接触としてイエス様に会うことはできないが、父なる神の住まい（天）に行かれたイエス様が、今も自分たちのために祈ってくださっているという意味でした。それは、使徒言行録の内容と結び付ければ、主なる神様のために備えをする使徒たちのために、イエス様が天で祈ってくださっているということです。イエス様が天に昇られた後、不安ながらも、心を合わせて祈り、欠員を補充し、聖霊降臨までの時を過ごしている使徒たちのために、天におられるイエス様も祈ってくださっているということです。冒頭に述べた、イエス様が天に昇られたことを信じるとは、わたしたちのために永遠の住まいを備えてくださっているという意味もありますが、今、地上にいるわたしたちのために、天におられるイエス様が祈ってくださっていることを信じる意味もあります。

最初の聖霊降臨から、約二千年の時を超えて、わたしたちは、今コロナ禍という今までにない大きな不安の中にあります。しかし、天に昇られたイエス様は、かつて弟子たちのために祈ってくださったように、わたしたちのために祈ってくださっています。その祈りは、地上において聖霊を通して具体化されるのですが、その最も大きな一つが、聖霊降臨日の出来事です。来週、教会は聖霊降臨日を迎えます。わたしたちの教会にとっては、わたしたちの教会の創立の意義を、もう一度深く心に刻むときでもあります。コロナ禍によって、できないことは数多くあります。しかし、コロナ禍だからこそ、できたこともあります。それらすべてがよりよい未来につながるために、ご一緒に祈り支え合いながら、歩みたいと思います。